(廿七日夕刊)
磐城新聞
休刊 大祭第一第三日曜
定價 壹枚二錢、壹ヶ月五十錢、郵稅十錢
廣告料 (雜報欄行五十錢 場所指定二十錢增)
發行兼編輯印刷人 遠沼龍輔
發行所 福島縣平町田町拾六 磐城新聞社 電話五六四番

全國禁酒大會に臨みて(上)

鈴木積善

今秋擧行せらるゝ御大典の記念として、去る八日より三日間東京は本青年館に於て日本國民禁酒同盟第九回大會、行はれ、引き續き三日間、修養團講堂に於て日本學生排酒聯盟並に青木經濟財團主催の下に禁酒同盟講習會が催された。私は縣下禁酒會を代表し、縣下禁酒同盟設立の要務を帶びこの大會に參列した。初の八日は佛教の祭祀であり世界に於ける最初の而も最も徹底せる禁酒の唱導者である釋尊の降誕祝賀花まつりなので、この偉聖を讃歎すると共に全市內に禁酒大宣傳が行はれ、夜は參會者の歡迎會が開かれたのであるが、私は自坊並に花まつり運動の爲め之れに參加することが出來ず、同日の夜行で上京、翌九日の開會式より出席した。夜汽車で疲れた身体を會場へ運んだのは、丁度同盟旗樹立式が濟み長尾理事長の告辭が始まる所であつた。

會場には綠地に白く染め拔いた日本國民禁酒同盟と大書せる長旗が壇の兩側に掛けられ、その背後には各その特色を表現せる加盟團体旗が美しく羅列されてゐた。場內には他の月並の大會とは違い、異樣な緊張味と和氣藹々たる氣分とが錯綜して漲つて居り、流石は社會矯風の第一線に立てる勇しき同志の會合たるを忘にしめた。告辭の中に、「最初は百名乃至百五十名位の出席者の見込であつたが、七百に垂んとする參會者を得、ことは時代の推移を雄辯に物語るもので欣喜に堪ねぬ云々」と述べられたが仲々の盛會にて、特に嬉しかつたことは地方の中堅青年がその大部分を占め婦人の參會者も見えた。あ〔…〕の神運動〔…〕學俊〔…〕ばぬことは勿論であるが、米國禁酒法の成立に見ても婦人の希望を一層堅まざるを得ぬ。

告辭に次いで、內務大臣東京府知事初め各友誼諸團体代表の祝辭、同盟理事小西氏の息女正子孃のピアノ獨奏、會員代表の答辭、禁酒歌の合唱等があつて式は閉ぢられ協議に移つた。協議は同盟提出の御大典記念事業として全國禁酒會未設置に禁酒會を設置すること外一件、及び加盟團体提出にかゝる御大典禁酒會館建設の件外八件が附議された。本會よりも公的會合に於ける禁酒實行に關する件外一件を提出の筈であつたが時間の餘裕なき爲めと他に同意味の題が提出されてゐた爲めにこれを中止した。當日は各協議案は委員附托とし各數名の委員を擧げたのみにて、前代議士宮島博士の講演ありて會を閉ぢた

この協議會が終り夜分の研究懇談會迄の時間を利用して本縣同盟創立總會を開く從來本縣下には四十の禁酒團体あるも未だその連絡統一の機關なかりし爲め、趣に本會發起となり之が統一機關の設立を計劃し、昨冬石川郡瀧川村自覺禁酒會長江田勇氏本會長桐谷文學氏に代りて縣下各會を歷訪し贊同を得たいが今回、この全國大會を機會に創立總會を開催したものである。鄉黨同志の集りは一入格別にして一見舊知の如く隔意なき協議懇談が行はれ、左の如き同盟規約が成立し

福島縣禁酒同盟規約

第一條 本同盟は福島縣禁酒同盟と稱す

第二條 本同盟は縣下禁酒主義を採る各團体の同盟協力により禁酒運動の統制發達其の教育の普及を圖るを以て目的とす

第三條 本同盟は本縣下に於ける各禁酒會禁酒主義をとる各種團体並に本會の趣旨に贊同する者にして本同盟に加盟せるものを以て組織す

第四條 本同盟の事務所は會長の所在地或は其屬する禁酒會の所在地とし會長之を定め各會に通知す

第五條 本同盟の經費は會長の屬する會にて負擔するを例とす、但し重要なる事業のため特に必要なる場合は總ての各會の承認を經て徵集し又は各會或は一般より任意の寄附を募集するを得

第六條 本同盟に左の役員を置く

一、會長 一名
一、副會長 二名
一、理事 若干名
一、幹事 若干名

會長、副會長は縣內各加盟團体代表者の互選とし理事は各禁酒會長或は其代表者各一名、幹事は會長の屬する會の役員中より會長之を指名す

※明日の吉凶※
新曆三月廿九日 舊曆二月八日

▲一白 見込違ひある日緊縮方鉢を採るが安全なり▲二黑 一小口舌ら大爭論さ成り易し內外共に注意▲三碧 投機的の事に手を出す時は大失敗を招く日▲四綠 相談事には兎角口舌の伴ひ易き日注意▲五黃 運氣壯なる如く見へても福の授からぬ日▲六白 事の大小となく密かに心を配りて進むべし▲七赤 運氣壯にして思はざる幸福も入來るべし▲八白 平凡に終る日急ぎ功を求むる時は却て凶▲九紫 樂々と進展し行く日開店起業入學何れも吉

講談

閻魔と男達

(74) 高田涙川作 尾崎雪廣齋

政吉の働き

武術と力量に於て敢て人後にたちぬ金五郎も飛び道具には勝てなかつた

「ソレッ野郎共あの小僧を叩き切れッ」

源氏車の小兵衛は金五郎の倒れた姿を見てマンマと成功せりと子分どもに聲をかけると二十餘名のやつらがバラ〳〵ッと金五郎を取りかこんだ

「ウヌッ……卑怯千萬な小兵衛の野郎男と男とが出入りに飛道具を用ひるとは何事だデこの鬼面の政吉が金五郎先生に加勢をいたしてくれるッ」

藤兵衛一家の一番の腕達者な政吉がこの有樣を見て飛びこんできて金五郎を取りかこむその中へ眞裸体となり太刀を振り翳した勢ひは鬼神も三舍を避けるかと思はるゝばかりの物凄さであつた、小兵衛の子分らはその勇氣に怖れバラ〳〵と左右へちつた、金五郎は足を負傷し立上るは困難ながら勇氣はうせない。

「サア野郎共、この金五郎はこんな傷ぐらいでビクともするものぢやねへ手めへのやうなこつぱ野郎を相手にするのに兩足はかへつて分にすぎるわいッ、サアどこからでも切つてこい片ッぱしからやつてしまふぞ」

刀をとつて八方に目を配つた金五郎の腕は元より十分承知であるから誰もよりつかない。

「サア野郎ども金五郎先生がおそろしけりヤアこの政吉が相手になつてやる」

再び大勢の中へ切り込んだ

「それ政吉だ、用心しろ」

小兵衛の身內のやつはあとへ〳〵と下るのみであつた

「エーッ、意氣地のない野郎共ッ、高が政吉一人のためにその有樣は何事だッ、サア小兵衛が相手だ」

鶴見の小兵衛は今金五郎を切らねばこの機會は又と得難いと子分に命じたが鬼面の政吉に切り立てられるを見て自身に乘り出した。

「オ、小兵衛、この政吉が引導を渡してやる、念佛となへて覺悟をしろッ」

「何をこしやくな鬼面の政吉、この小兵衛の切ッ先が受けられるものなら受けて見ろッ……」

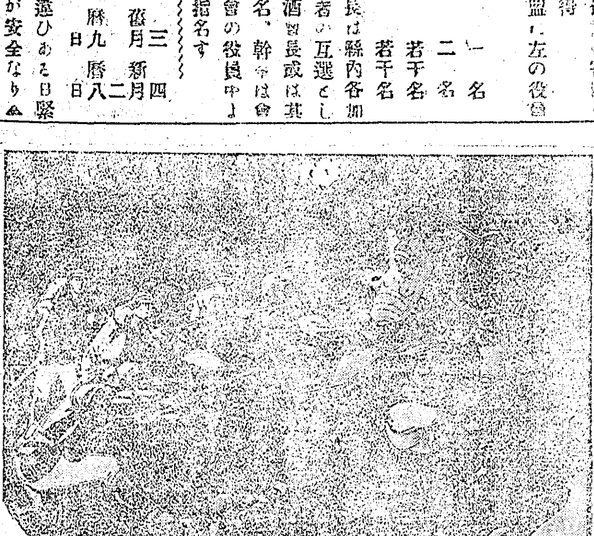
こゝに小兵衛と政吉の一騎討となり双方必死の勇を揮ふ政吉が一足ふみ小兵衛を上段より切りたろさんとするを小兵衛はチャリン…と受けとめた、己れッと再びうしろへ引く途端そこに倒れて居たけが人につまづきに仰向けに倒れた。

小兵衛はしてやつたりと疊かけてきり下すをけんくわになれた、政吉倒れながらに小兵衛の足を拂ふ小兵衛もさるもの二三尺とび下るその間に政吉は素早く起き上つた

「ウヌ小兵衛今度はのがさぬぞッ」

「何をしやらくさい」

再び政吉と小兵衛の兩人は力を合せた。全體の爭闘はなは盛んであるが小兵衛と敬次の聯合軍はどうも振はない。小兵衛に於ては金五郎さへやつてしまへばこの頽勢を挽回できると信じた。それを鬼面の政吉に妨げられたのでじやかひでも政吉をやつてしまはんとあせるもナカ〳〵かへつて政吉に切りこまれさうである。この時ウワーッーときの聲と共に名たすきの連中が右往左往に逃だした



◎◎◎◎◎
新茶賣出し

若葉匂ふ行樂の春御待ち兼の根本園の新茶馥郁たる香味、他日千金を投ずるも味はひ難し

新茶はヴイタミン多量に含有して殊に殺菌力に富み衛生と滋養を完備せる經濟飲料界の王なり

安くて評判の根本園の家庭ホージ茶

根本園茶店 平町四丁目(電二一七)

診療開始
外科 花柳病科 專門
木村外科醫院
平町六丁目橋際(元〇久材木店跡)
入院自炊ノ便アリ

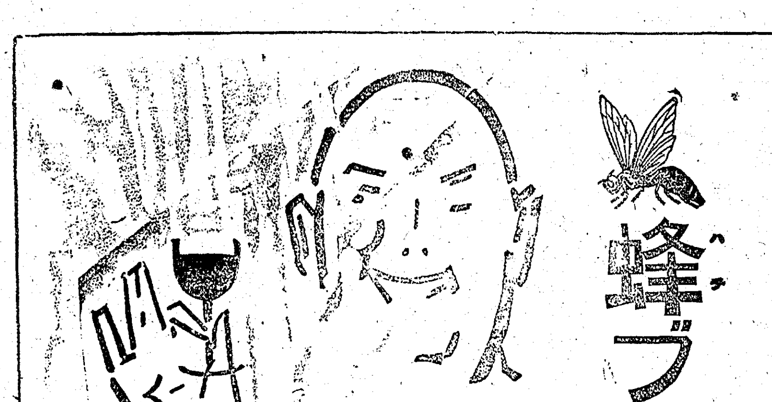
花見のお供に
松本のパン

ウズマキ	5錢
バンズ	5錢
プラム	5錢
ミツワ	5錢
レモン	5錢
松本パン	5錢
フイツシユ	5錢
ジヤムサンドウ井ツチ	5錢
黒パン	5錢
食パン 1斤	16錢

ヤトモツマ
平町四丁目 電話二一四番

嶄新ノ魁
春物ノ準備ガ出來マシタ
婦人洋傘 春シヨール 子供洋服 ワイシヤツ 合シヤツ 春着中折
種々店内ニ陳列シテ有リマス
鶴屋商店 電話百四十番

內科 小兒科 皮膚科 花柳科
平町舊城跡(城山)
青沼醫院
醫學士 青沼淡夫
電話四〇三番

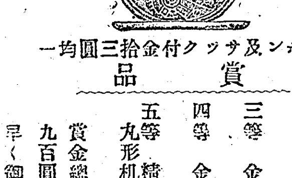


土木建築 請負
平町郊外關ノ上
強口唯七郎
電話四〇一番
砂利、砂は御用命あり次第多少に不拘迅速に御届けいたします

金牌一等賞受領
磐城國平町
草野染工場
電話三四八番
◎徒弟入用
徒弟契約ニ付テハ年明キニ際シ有利ニ御相談申上候

夜間診療
胃腸 內科 十二指腸虫病 專門 內科部
黴毒 淋病 婦人病 皮膚病 專門 外科部
平町南町 〔…〕病院 電話一〇七

丸形セイコー腕時計普及宣傳特賣
賞品付セイコー腕時計大賣出し
期間昭和三年三月十五日より七月一日迄
一本も空籤なし


示時正確

賞品
リボン及サック付金拾三圓均一

一等 金壹百圓(復興債券)五十本
二等 金五十圓(同)百本
三等 金拾圓(同)二百本
四等 金五圓(同)五百本
五等 丸形精工舍製ニッケル机上時計壹個 四萬九千餘個
賞金總額金拾萬弐千九百圓餘賣切ぬ內御早く御買上を乞ふ

特約發賣店 平町三丁目 大谷時計病院 電話一九番

平町紺屋町
吉田眼科醫院

ユラノスケ瓶詰
花見時の特價
空瓶交換のレッテルをはらずに
四合瓶詰 一本 四十三錢
二合瓶詰 一本 二十二錢
大口の御注文はなるたけ前日迄に御申付下され度
永山酒造店小賣部
瓶詰出張販賣所
電話二〇七番

縣營通り進行する 愛谷堰元工事
けふ一部を通水して 今秋取入に竣工

平町外四ヶ村の水田七百町歩[illegible]な、秋の彼岸となれば急への灌漑水路たる愛谷堰速改修することになつてゐ改修工事は總工費一十六萬圓を以て内務省の設計に基き縣營式により改修をなすべく既に二ヶ年を要して新川の鐵筋コンクリート掛樋を初めとして護岸工事、好間川サイホン等水路の全工事を完成したので本年からは愈よ／＼取入れ口の自動堰を改修することになり[illegible]上流に於いて好間川底を通じサイホンは直徑五尺の鐵筋コンクリート管長さ四間のもので工費四萬八千圓を要しこの程竣工したので廿七日午後一時縣耕地課長代理堤技手出張臨席の上通水式を擧行したが取入口工事は目下耕口用水期なので諸果料等を用意稻田の水不用

宮炭礦の 鼠賊捕はる
坑夫の利八

内郷村大字宮の磐炭坑坑夫長屋を數日前から頻に胡鼠泥棒が横行するので平署では犯人を探査中昨廿六日午後十時頃内郷村綴驛前を密行中の平署猪狩刑事が擧動不審な坑夫体の男を發見本署に引致嚴重取調た結果此奴は信夫郡中野村生れ當時内郷村磐炭坑坑夫木村利八(四二)で去る一月中宮の坑夫長屋居住佐川彌吉方から衣類數點を竊取したのを手始めに前後十數回に亘り胡鼠泥を働いてゐた事を自白した

酌婦を囮にして 喰ふ桂庵を告訴
小檜山留四郎外一名を 平署で取調中

田村郡逢隈村鬼生田川前德衛は平町字南町人事周旋業小檜山留四郎(五〇)東京府下龜戸町福永事務所橋本正秀(三四)の兩名を相手取り今廿七日平署に營利誘拐の告訴を提起したが告訴の内容は原告川前德彌の姿原留コトは目下郡山市柳内に飲食店を開いてゐるが昨年十一月前記被告兩名は神奈川縣高座郡綾瀬村比留川善吉二女リヨウ(三四)を酌婦に周旋するからと言ふので前借三百圓で住込の契約を爲したが今年一月頃になりリヨウは同家の抱酌婦大山コト(三〇)を連れ出し行方を晦ましたので德彌は酌婦兩名の行方を搜査中だが川前の調べた處に依ると被告等兩名は前記リヨウを[illegible]として酌婦に住込しめ前借を踏み倒すばかりでなく必らず酌婦一、二名を甘言で連れ出し賣り飛すのを常習手段としてゐた形跡があると言ふので平署では直ちに事實の取調を開始した

平を練つて 好間に向ふ
メーデー當日

來る五月一日のメーデー當日磐城勞農黨を支持して來た石城一般勞働者組合では山城吉宗が同會員を爲り盛大な勞働祭を擧行すべく目下準備を進めてゐるが當日の計畫は午前九時平町松ケ岡公園に集合直ちに平町本通を練り驛前から好間村に同村から山越して内郷磐城炭坑を經湯本町を練つて磐崎村小野田坑に至り示威行列を解散する筈だが此れに就いて平警察署では示威行列は許可する方針だが勿論一定の制限を附して萬一此れを犯す樣な事があつたなら適當な處分をする」と語つてゐた尚解散後同日午後六時からメーデー記念講演會を催すと

平署管内の 清潔法
左記日割執行

平警察署管内各町村春季衛生掃除は平、小名濱町ﾄ小川村の三ヶ町をのぞき二十四日から左記日割によつて施行すると
二十四日赤井村△二十八日神谷、平窪、好間、高久、鹿島各村△二十九日赤井、川瀬炭礦△五月[illegible]飯野村、[illegible]萩、磐崎村△二日湯本町、夏井村△三日[illegible]、箕輪村△四日江名町△五日豐間、[illegible]川、内郷各村△六日小野田、古河、赤井品川、藤原、磐城川平、好間、隅田各炭礦及工場△八日好間、小田炭礦、七、八、九日三坂村、澤渡村△十一日永戸村

平消防視察
高知縣から來平

高知縣消防協會では全國的優良消防組として知られてゐる平消防組を視察する爲め今廿七日同縣保安課柳瀬山本兩部長を始め同縣下消防組頭十四名が來平消防器具其の他統計等の視察を爲した

[illegible]森に於いて[illegible]總會を開催し今年度[illegible]其苗代に關する協議[illegible]をした

夫婦になれぬを嘆す 松林で服毒心中
湯本温泉を漂浪い 久の濱海岸へ

久之濱町海岸字中野松林から二十四日夕刻異樣なうめき聲が聞こゆるので同町の坂本よしが近寄りて見ると若い男女が姿をとりみだして苦悶してゐるのを發見、驚いて所轄四倉署に知らせたので同署から係員出張檢視の結果男は石川郡川東村安藤直次(三〇)女は田村郡三春町字八幡町渡邊アヤ(二〇)とて二人は昨年春頃より戀仲となり親か許さ[illegible]モチン五十錠と猫イラズをのんで情死を企てたものであるが男は生命全く危篤で女は手當の結果一命はとりとめた

四倉神職會
役員選擧を兼ね

石城郡四倉署管内神官二十名は去る二十四日四倉港内に協議會を開催し社會人心善導を目的とする報告なるものを組織したが役員は選擧の結果左の如く決定した
四倉町花澤賢有、大津村阿部順孝、久之濱町高木、大久村石川榮堂

磐崎農事實行

磐崎村下船尾農事實行組合で今廿七日午前十時から同村笛[illegible]

不審の記者
平署身元調査

平町城山ラジウム旅館方に去る十八日夜來東京日日新聞記者作野宗雄(三七)國民新聞記者安藤勇雄(三七)同人妻セツ(三四)と自稱してゐる此宿客の擧動に頗る不審の點があるので平署では秘密裡に同人等の身元並に擧動の内偵中である

米びつを覗ふ賊
宮の坑夫長屋を荒し 平署に捕はる

内郷村大字宮字鬼ヶ津居住安積郡大槻村生れ磐城炭礦坑夫大原林造(四〇)は今廿七日午前〇時三十分頃附近坑夫長屋に居住する岡山治助方裏戸を破つて忍び入り米箱を竊取逃走しやうとしたのを治助が發見取押へた上平署へ突出したが餘罪ある見込で目下嚴重な取調を受けてゐる

社告

營業部員 大越一夫
右の者本日限り解雇致し候、自今本社と關係之無候段社告候也
四月廿六日
磐城新聞社

留置場悲話
生きて行かねばならぬ 罪の夫と妻の涙

△場所 平警察署小使室
▽時 廿六日午前九時

そこには今し留置所から出された何か、被疑者、それは薄汚い黑ラシャのモシリを着た四十男で爐端にうづくまり乍らなだ豆煙管を取出して紙袋から刻みを詰めかへ紫煙をくゆらしてゐるその側にはこれも男の身なりに相應しい程縞目も解らぬまでによごれたねんねこを着た男よりは三つ四つ年下とも見ゆる女が仁王立ちに立つて何か口ぎたなく罵つてゐる、その櫛目も通さぬ油氣のない髪の毛は雀の巣の如くその背なには靜かに寢いきを立てゝゐる生後二三ヶ月位の男か女かわからぬ赤兒が顏深くうづめて負はれてゐる、男女の間に生れた子供である事勿論で傍らには係りの警官が無言で兩人の對話を監視してゐる。

男は「もうこゝへ來た以上はいつ歸れるかた裁きを待つた上でなければ解らないから當分掛け先でも集めて食つてゐて呉れ」といふ樣な意味を語るのであつたが身の不心得から一家を路頭に迷はす樣な良人の仕打ちに極度の憤怒をさへ我ねるらしい女はいつかなきき入れる模樣もなく男が折角「何處そこに二十錢」「どこそこに十七錢」と零碎な肴、貸賃先をはなすのに耳を藉さずもゆる樣な憎惡のまなざしを以て首低くうなだれてゐる良人のうしろ姿を凝視してゐる

勝手に歸ることが出來ない理由を話す亭主の言葉を耳に入れぬ女はつひに「それではおめえは歸る氣やねえんだな、よしつそれでは明日わらし達をみんな引つ張つて來てこ處へ置いて行くからそう思へっ」と威猛高に捨て臺詞して湯呑所の外へ出てしまつた

「馬鹿なもんだなあ……」萬策つきた男の當惑顏にはやがて淡い反抗の微笑が浮んだ男は警官に急ぎ立てられて再び留置所の重い扉の中へ入れられた

何でも赤井常盤炭礦附近に住む肴屋で何かの不始末をし出かしてここへ引き立てられたものらしく夫婦の間には他へ奉公に出してゐる總領のほか先刻の乳呑み子ども四人の小さい小供があるといふのが傍らで無言で鄙紙を刷つてゐた小使爺の氣を妙に滅入らせてしまつたとある

義太夫評
カラス天狗

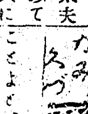
卆、若葉會の義太夫大講習會を聽き、極く簡略に寸評を御披露する、暴言を許されたい。

△豐之助さんの朝顏日記頗る數が掛つたものでよくネレて居りました、但し川止から鼻に掛つて折角の上物を安價に賣つたようであつた。

△古柳さんの手習小屋先づ無難力は充分にはいつたが事は僅かなもの、けれ共松王が少し年寄り過ぎはせぬか、松王丸はケ病を使つて時平公から暇を取る手段に過ぎぬので源藏への物語り邊は松王の生地で行き度いと思つた太夫の一考を煩はす

何と云ふても當夜隨一の花形桝美太夫さん、これ程よく仕上つたとはイヨー全く意想外の上出來、ダガ女振りを崩すまいと努めるセイか愛が足らぬ即ち泣きが足らぬ、クリ上げなどは惜哉平の凡だソレ故あれ程の鳴戸で涙を落した客がない義太夫の時丈けは顏の造作が崩れたとて惚れた旦那はいやにならぬトヨ、錦太夫聲の無い所を身振りを以て負の長吉姉の小梅と共にた客を泣かしたのはさすが老巧

かみくづ



△錦太夫、伊賀越これは御土産として持歸りました ◆彼女は如何に喇巧である、ことよと、言ひたくなる。花美が國粹保存の爲め由良之助黨を作り大いに旦那を利せんとするは是れ即ち直接已れの着物となり活動見物の玉代となるその喇巧と旦那の親切にあてられざらんとするも豈得べけんやさくる◆た鯉が轉任するといふので、親切者がセッセと餞別を募集してるといふから好い心がけだ、處がアニ計らんや今まで脱税してゐたナニかの代金を拂ふつもりで出すのだとは呆れるそれにしてもお鯉の博愛衆に及ぼした賜もので、陰德あれば陽報ありと金言我れをあざむかず正にこれ昭和の美事と謂ひつべしだ誰れだイ穴カシコ／＼なんて言つてるのは。

帝國議會停會
田中總理の奏請に依り 廿七日から三日間

政府は今廿七日野黨民政黨の總括的内閣不信任案及野黨聯盟の二決議案を衆議院に提案緊急上程の同意を政府に求め來たるに依り野黨各派の反省を促すべく總理大臣田中義一男は議會の停會を奏請即刻議會の停會を命ぜられた

創立七週年記念に 嶄新な二つの大懸賞
興味の中心に立つ此の方法 幸運者は三千圓當選

本社七週年記念事業の一なる懸賞は愈々左の方法により執行する事と致しました、曩きに發表した『寶探し』に代る最も嶄新な愛讀者各位に對し一般的の興味ある方法を選擇いたしましたから御吹聽の上精々奮つて當選の程を御願ひ申上ます。

△第一の懸賞

◇方法 五月一日發行夕刊(五月二日附)本紙第二面全紙中「漢字の誤字が何字あるか」をハガキに書いて本社懸賞係り宛て御出し下さい

◇締切 五月三日締切り當選者は五月五日夕刊に發表(正確に當て〻方が多數の場合は在平日何有志記者立會抽籤の上當選者一名を決す)

◇懸賞 當選者には割増金三千圓附復興債券十圓券一枚を贈呈(外に平町五丁目山野邊藥局寄贈の副賞)

△第二の懸賞

◇方法 五月三、四の兩日に限り平町活動常設平館で興行する特別大映畫會の入場者にして本紙刷込みの(五月一日夕刊より刷込み)割引券を持參入場した方に限り入場の際福引番號券を差上ます

◇抽籤 抽籤は三日、四日の兩日共午後九時半同館に於て觀衆中より三名を立合はせた上執行し當選者毎晩三名を決定します

◇懸賞 一等割増金千五百圓附復興債券五圓券一枚(二等)價格三圓位の物品(三等)價格一圓五十錢位の物品を贈呈致します

磐城新聞社

祝創刊七週年

諸橋守次

諸橋元三郎
釜屋商店
電話九番

漆畑元吉
平町(電三六二)

千葉彦治
平町(電三六五)

白馬の雪 勿來正宗 釀造元
松本德一
石城郡平窪村

小名濱消防組頭
小濱長太郎
小名濱町(電話一〇)

高橋龜松
平町白銀町